

〔曲名〕 丘の教会堂

〔曲種〕

〔作曲者〕 Jiro Nakano

中野二郎

〔編曲〕

1933年9月29日やはりギター独奏曲として作曲し、1939年マンドリン五重奏曲として仙台アルモニアで出版された。

当初の作曲当時、名古屋医科大学教授長松博士の主催する第四日曜会と称する会があり、第月第四日曜に近郊に出かけて親交を深めた。

筆者もギターを持って参加し歌ったり奏いたりした。

川中の岩によじ登って合唱したり、湖に舟を浮べて歌ったり、

荷馬車を借りて皆之に乗り私がギターの伴奏しながら田舎路を練り歩いたりした。

メンバーはクリスチャンが多かったが宗教的色彩は無かった。

然し歌う段になると讃美歌が多かったのでお蔭で随分讃美歌を覚えて了った。

そうした関係でこの曲は長松博士に献曲されているが、その博士も終戦後間もなく亡くなってすつた。

昨年亡くなった本邦合唱界の権威津川圭一は名古屋出身で筆者もその指導を受けた一人であるが氏の合唱曲に丘の教会堂なる佳曲があり、之とは全く別のイメージにより作ったもの。

少年時代日曜学校に通い一応教会の雰囲気は知っていたが、

其の後ものの本で西欧の教会の在り方が解るにつれて無縁なものになって了つた。

クリスマスになると讃美歌歌ったことのないような人までがクリスマスケーキをぶら下げて家路に急ぐのを見たり、

百貨店に入ってエスカレーターに乗っているとジングルベルで責めたてられると何か手ぶらで帰るのは

悪いような気になる妙なクリスマス気分である。

この曲は静かを敬虔（けいけん）なクリスマスを迎える日の近い教会の風景。

粉雪の降る丘の教会堂で讃美歌の練習に余念のない有様を思って頂けばよい。

中程で弱かるべきところを強く歌ってピアノシモで歌い直すところは意識的にそうしたもので誤りではない。

イタリアマンドリン百曲選別冊 日本の郷愁（1）より

1972年2月1日発行

「イタリアマンドリン百曲選」の第15集に先だって、「日本の郷愁(1)が出ましたので第15集の解説の本誌No15の発刊があとになりました。

頒価・各集共解説「いるぷれっとろ」付書留送料共¥2,000